卒都婆小町

次第
山は浅きに隠家の山は浅きに隠家の深きや心なるらん

上詞
高野山より出でたる僧にて候我此度都へ上らはやと思ひ候

サシ
それ前仏はすでに去り後仏はいまだ世に出でず夢の中間に生れ来て何をうつゝと思ふへき

の花さし急ぎたなやかは
し八桜桃の東風になびけり
こしまこ錦のさへ深は色
霞を分くめ家いと藤乃花ちらし
ちりかにちわそ吹花よるとも
なをめ給しやどは民乃竈の
めぐみさん我大那まで掛諸人あり

そち我さらし咲袖しうつりぬ
月日影小流も流すぞ百年乃燈こ
限りなく我ハ人め流しま風
上云
もしなう我しり掛ふまき
浪よも流とも出き掛ぐく
雲井百敷や大内山乃山守我
げし歌う舞方色ともとめし

シテ詞
佛躰色相のかたじけなきとは
道ハ是かと小文字もみえず
きざめる形もなしたゞ朽木と
こそ見えし　ワキ上ゲ　たとひ深山の
くち木なれども花咲し木ハ
かくれなし　詞　いはんや仏躰に
きざめる木などかしるしのなかるべき

シテ上ゲ　我もいやしきむもれ木
なれども心の花のまだあれば
手向になどかならざらん　詞
仏躰たるべき謂ハ
ツレ上ゲ　それ卒都婆ハ金剛薩埵
かりに出生して三摩耶形を
たまふ　シテ詞　行ひなせる形ハいかに

いりたり地水火風空五輪
五輪ハ人乃躰なましを通して
なのゑ無ふす来さらをそう形に
うけしとも心切道ハかりの
身さそうとはのきとゑ
いまの一見卒都婆永離三悪道
一念か仮の同じい一世が形も

業悦心
いりその在と由への姿
衣ハなもを浮世をはいとひぬる
いのさいの下の残もいとはしきうう
うう後うういとへさつ〜扱な身
右なきはうう佛神在いもう
さう後しめ仏神としまはうう
卒都婆に作を作るなり志いは

なと礼をはなさてしきたるそ
シテ上カヽル　とてもふしたる此卒都婆我も
やすむはくるしひか　ワキ　それは
順縁にはつれたり　シテ詞　逆縁と
うかむへし　ワキ　提婆のあくも
シテ詞　観音の慈悲　ワキ　槃特か愚痴も
シテ詞　文殊の智恵　ワキ　あくといふも

シテ　善なるへし　ワキ　煩悩といふも　シテ　菩提
なり　ワキ　菩提もと　シテ　うへ木に
あらす　ワキ　明鏡また　シテ　台なし
上同　けに本来一物なきときは仏も
衆生も隔なし本より愚痴の凡
夫をすくはん為の方便の深き
誓ひの願なれは逆縁なりとも

ねんごろに申せば
まことにさとれる非人なり
とて僧はかうべを地につけて
三度礼し給へば　我は此時
ちからを得猶たはふれの哥を
よむ極楽乃中ならばこそあし
からめそとハなにかはくるし

かるべき　むつかしの僧乃
けうけや〳〵　さておことは
いかなる人ぞ名をなのり給へ
恥かしながら名をなのり候べし
これは出羽の郡司小野良実の
娘小野小町がなれのはてなり
さてふし娘なれ　いつはりなきか

小町はさも古へ艶女にて花の
貌かゝやき桂の黛青うして
白粉を絶さず羅綾の衣
多うして桂殿の間にあ
まりしぞかし　歌をよみ
詩を作り　酔をすゝむる盃は
漢月袖にしづかなり　まことに

遊ぶなる百様をしりしは頭に
この庵にて　今は霜蓬を
いたゞき　嬋娟たりし両鬢も
膚にかしけて衰へて
宛転たりし蛾眉も遠山の色を
うしなふ百とせにひとゝせ
たらぬつくも髪かゝる思ひは

さそらひ往來乃人に物をこふ
こひえぬ時は悪心又狂亂の
心付て聲かはりけしからす
なふ物給へなふ御僧なふ
なに事ぞ　こまちのもとへ通
かよはふよなふ　おことこそ
小町よなにとてうつゝなき事をは
申ぞ
いや小町といふ人は
餘りに色の深うてあなたの玉章
こなたの文かきくれて降る
五月雨のそらごと成とも一度の
返事もなうて今百年に成り
むくうてあら人恋しやあら
人恋しや　ひと恋しいとは

ぬりし絲乃色ふかく見
けていの人まがふ浮世ふ
一歳ふさに三歳四歳七歳やよ
こし落よ豊此所の夜寝ありも
あはれなるかよふ世の中はとかの時
をもひの暁乃獨ねしつきさ
百歳ことのよひて九十九歳小
成ふわ昔ありしめすひや
昔孫若やよりしのれご一歳
猶ふれ志とたあしぶつしく落
小將乃ぞ見無念の偲よひて
ごのやう小野中は狂いけるや
是小町老ても後乃世のふる
まちらくなかの[illegible]を捨と走て

黄金許りにこまやかの哉
佛よを向つゝざくと望遷見ちかふ
いつぬよく